
東京HEAVEN ~ Zの章 ~

いとむぎあむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京HEAVEN＼＼＼の章

【Nコード】

N8349C

【作者名】

いとむぎあむ

【あらすじ】

逆東京。そこは、普通の人間が踏み入れてはいけない場所である。現世と霊界を舞台に数奇な運命のもとに生まれてきた少年を中心に繰り広げられる騒動の数々！その原点がここに！

これは起死回生をイメージして、各章はアルファベットの後ろから始まっています。アルファベットの後ろの章から順番にお読みください。

プロローグ

この世には、不思議な事が沢山ある。そんなことは、誰もが知っている。非現実的なことは、必ず貴方の元にも訪れる。非現実的なことがあれば、当然、非人間もいる。異端者というべき存在のことだ。しかし、“生きてる人間は全員異端者”という説もある。確かにそれも間違いではない。人間だって、その気になれば神様にだってなれるのだからね。

さてと。じゃ、本題に入ろう。

皆さん。“逆東京”という場所を知ってますか？時々ね：東京こっちの人が、逆世界あっちに来るんですよ。で、もし行きたいっていうのなら、月蝕の日の深夜0時の電車を乗るといいですよ。ね？簡単でしょ。まあ……帰って来れる保証はありませんけど……。おや？お客さんですか。では。また後程……。

「あれ？」

僕は揺れている夜の電車に乗っている。他に乘っている人はいない。その手には、打ちかけのメール画面の携帯電話。時間をチエックしようと、腕時計に目を向けた。深夜の0時。

「ん？そんな時間に電車って走ってたっけ？でも、現に乗ってるし……」

僕は夜間学校で6時から10時までだ。で、学校を出て電車に乗ったのが、10時30分だ。おかしい。どう考えても異常だ。なのにどうして現在の時刻が、深夜の0時なんだ？僕はちよつと首を傾げた。すると、電車が急ブレーキで止まり、僕は変な格好で座席から落ちた。

「な！ぬあ！？」

思わず意味不明な声を出してしまった。どうやら、終点らしいが、駅名がおかしい。

逆東京駅

「い…一体ここは…どこだ？」

おやおや。最近、知らないで来る人が多くて困りますよ。まったく。説明するのメンドーなんですから…。ん？おや。彼女も乗車してましたか。これは助かりました。でも、まだ揃っていないよ。うなので、続きはまた今度。

逆東京という場所

いらつしゃい。また来てくれて嬉しいよ。実は、役者が集まったんだ。ほら…

僕は今、混乱中である。電車に乗っていたら、終点は「逆東京駅」。
。てか、どこだよ!? 電車の入り口付近で悩む僕。すると、視界の端を誰かが通った。慌てて顔を上げると、そこには同年代くらいの女の子。セーラー服にポニーテールの黒髪。透き通るような翡翠の瞳が、僕を睨んだ。数分ダンマリが続いた。そして、最初に口を開いたのは、彼女だった。

「…あなた…ここがどこだか分かる？」

「あ…ううん」

「そう。…はあ…、また不用意な客か…めんどくさい。着いて来て僕は彼女に呼ばれるまま、黙って着いて行った。着いたトコロは、古い木造の家。今時、木造とは珍しい。ドアを開けると、上のベルが鳴った。

「桑田くわた！いる!？」

「あー。はいはい」

と、カウンターの後ろの階段を駆け下りてきたのは、茶髪に少し白髪があり、眼鏡をかけた20代くらいの男性。オレンジのトレーナーに茶色のズボンというちょっとダサい服装だった。

「どういうこと！客が来たことくらい知っていたでしょ!」

少女は、容赦なく男を怒鳴りつける。男は、さっきまでのヘラヘラ顔を歪めた。

「はい…すみません。忙しかったもので…」

「はあ…ったく。異端者じゃない人間をひよいひよい引き入れるんじゃないわよ」

「しかたないでしょ。ワタシは、そこまで操作できないんですから」
「っ……。で？君、名前は？」

彼女は、ぱつと振り返り、キツイ眼差しで僕に名前を聞いた。

たかはしてっぺい
「高橋哲平」

「そう。アタシは、羅刹。ひすみらせし歪羅刹。羅刹って呼び捨てでいい」

「え・っ。と。ワタシは、桑田宗助くわたそうすけです。桑田でいいですから」

一応名乗ったが、彼等に聞きたいことは山ほどある。此処はどこか？それで頭がいっぱいだ。

「えっと…突然なんですけど、此処は…どこ？」

二人同時に僕に注目した。

「逆東京。死んだ魂が生活する天国のようなトコ…っっていうのが、分かりやすいよね？」

「そうよ！もうっ」

「し…死んだ…魂！？」

「そう。人間だけじゃないわ。動物の魂もここに来る。で、桑田はここにやって来る新しい魂と生きた客人を出迎える役目を持っている」

「え…？じゃあ、羅刹も？」

「いきなり呼び捨て！…まあいいけど。違うわ。アタシは、魔女だもん」

「ま、ま、ま、魔女お！！！！…？？」

「…そんなに驚くこと？」

「だって…どう見ても、普通の女の子にしか…」

その言葉に、羅刹は眉を顰めた。

「…ふうん。アンタから見たら、アタシは“普通の女の子”なんだ」
怒っているわけではなさそうだ。ただ、明らかに否定している。

“普通”という言葉に反応したトコロを見ると、その言葉は禁句らしい。

「…さてと。せっかくのお客です。ゆっくりと見物していくといい。
羅刹さん、付き合っただけならどうです？」

「…別にいいけど」

少し剥れた顔で返事をした。そして、静かに店のドアを閉めた。

はあ…。…え？どうしてため息なんかついてるかって？…それは、少し残酷な事があったからですよ。まあ、今日は疲れたんで、またのお越しをお待ちします。

煉獄眼

やあ。また来てくれたんですか。嬉しい限りです。さあ、どうぞ。

お互いまったく会話のないまま歩き続ける。高橋哲平と歪羅刹。

哲平は、興味深そうに周りをキョロキョロと見た。

「田舎者みたいじゃない。気になるからやめて」

「いや…ごめん。外とあんまり変わらないな、ってね」

「…まあね。死んでもなお、上に居たがる連中が大勢いる。だから、上と何の変わりもないように設計したの。設計者は、桑田」

「桑田さんが…？」

「ええ。アイツは、一応ここの責任者だから。あの家は、役所みたいなもの。あそこで、入国手続きやることになってるの。アタシたち魔女は、特別。この場所を与えたのは、魔女だからね」

「へえ…羅刹ってすごいんだ」

「！…うるさい」

哲平は、少し可愛いと思った。その時。プリプリ怒っていた羅刹の足が止まった。

「……」

「何？どうしたの??」

「…来る」

と、いきなり走り出してしまった羅刹を、何も分からず追いかけた僕。その目の前の光景に僕は息も止まりそうだった。沢山の黒い顔の集まったもの。その顔一つ一つが、叫び声を上げている。

「やはり、来たか。神霊」

「へ？神霊…、ちよっと待った!!」

「…何？」

「神霊って、神の霊って書いて『神霊』だろ？」

「そうよ。それ以外に読み方なんてないじゃない」

「いや、あるんだけどさ…。じゃなくて、要するに神様の霊だろ！
？倒してどうすんだよ！？」

「…神様って言っても、煉獄界の神よ」

「煉獄界？」

「そう。元々、逆世界と地獄の間にあつた煉獄界。昔、“ある罪”
を犯して、神に煉獄界ごと墮とされた煉獄王がその憎悪から、上に
神霊を送っては、破壊しようとしているの」

「え！“ある罪”…？」

「のんきなこと言つてないで、隠れてなさいよ！」

羅刹に睨まれ、哲平はゾツと身を震わせた。そして、建物の陰に
隠れた。羅刹はスカートを少したくし上げ、太ももに着用していた
細長い銀の針を三本指の間に挟めた。

「さあ、来なさい！！」

羅刹の声と共に神霊たちは、羅刹に一直線に向かつてきた。少し
苦しうに顔を歪め、銀の矢を一本一本自由に操った。しかし、後
ろから見ていた哲平は、はっとした。羅刹の背後から忍び寄る神霊
がいることに。

「羅刹！！！！」

そして、その瞬間に“アレ”が開いた。赤い光りを放つその眼は、
神霊を忽ち炎で焼き尽くした。羅刹はその光景に目を丸くした。

「ディスプレイ煉獄眼…！！」

「ほお…こんな少年に…ね」

「！桑田！！いつの間…」

「ま、彼を連れて行きますよ」

「…分かつてる」

その場に眠ってしまった哲平を桑田が負ぶって、家に戻った。

哲平が目を覚ますと、左目は真っ黒で、何かに視界を遮られていた。なんとか見える右目で、辺りを見回した。そこは、桑田の家の寝室らしい。何が起こったのか理解出来ず、哲平は少しうろたえた。すると、そこへ紅茶のカップを持つ桑田と羅刹が不機嫌そうな表情で入ってきた。

「やあ、目が覚めたんだね？」

「あ、はい」

「まったく…世話掛けさせないで」

「…ごめん」

「まあまあ。さてと、哲平君、君は先ほど何が起こったのか、覚えているかい？」

「ん…、全然」

「…やはり」

「…桑田さん、この眼帯…？」

「…ああ、取っちゃダメだよ。取ったら、封印が解けてしまうからね」

「ふっ、封印？」

哲平はなんだか、頭がクラクラしてきて、ベッドに倒れた。

「哲平君、君は自分が死人だという感覚はあるかい？」

「あ、ありません」

「…歪クン、これは…」

「ええ、多分ね」

「？」

「…哲平君、君は魔人の一種かもしれない」

「まっ、魔人!？」

「そうだ。君は、さつき歪クンを助けるために、左目のコンタクトを無意識に取ったろ？」

「ん…そうかも」

「それだ。君は、左目の視力が極端に悪い。その原因は、左目が魔人のものだからだ。煉獄眼デイスホールドと言つて、ある特定の魔人しか持つていないといわれる、とても貴重な魔眼だ。しかし、時々極稀に死んだ人間に自然に移植されることがあるんだ。しかし、君は死んでいない。…て、ことは…」

「僕は…魔人？」

「そ」

唐突にそんなことを言われたが、理解や飲み込みの早い僕は、得に焦ることもなかった。

「つてことは…僕の両親のどっちかが、魔人つてこと？」

「そうなるね」

「ん…父さんかな？母さんかな…？」

「ふむ、そのことなんだが…」

「へ？」

「実は、十九年前に行方不明になった一人の魔人がいてな…」

「えっと、名前は？」

「ツバサ…という」

「嘘！それ兄貴の名前だ！」

「お兄さんか…転生か？」

「違う。ツバサは、そんなセコイことしないわ。多分、記憶を少し変えたんだと思う。そして、生まれた弟に魔眼を移植したのよ」

「兄貴が…」

「その通り」

「ツバサ！」

「あ、兄貴！！」

そこに立っていたのは、哲平の兄にして魔人のツバサだった。茶髪に長身のいかにも兄のような青年だった。

「兄貴…なんで僕に…これを…？」

「ん？まあ…素質があつたわけだし」

「不本意よ、ツバサ！！」

「おいおい、久し振りにあつた彼氏にそれはねーだろ？」

「か、彼氏！！！」

「歪クン、それはこの桑田も初耳ですよ」

「うう…昔のよ！！」

「おや？とか言つて、毎日手紙送つてたの誰だよ？」

「うるさい！！」

「ツバサ君、説明してくれるか？」

「ああ。いいだろう。すべて、話そう」

ツバサの口から語られる真実に僕は、少し恐怖を感じてならなかった。

託されたものは

僕は昔っから、左目を触られるのを嫌がっていた。その光景を見るたびに、兄貴は眉間にシワを寄せ、申し訳なさそうにしていた。僕はそれが不思議でならなかった。

逆東京で出会った歪羅刹デイスホールドと桑田波子。そこへ迷い込んだ少年・高橋哲平は、実は煉獄眼の持ち主だった。そして、哲平の兄・高橋翼は、魔人の一人だった。

「話そう。すべての元凶を」

「元凶？ どういうことなの、ツバサ」

「羅刹、そんなに焦るな。まずは、俺が何故現世に足を運んだのかだ」

……。

「魔人、ツバサをリストから抹消する」

「大魔人様方！ 何故ですか！？」

「うむ…。あやつは、我が逆東京に災いを齎す者。魔人の名を汚すものをいつまでも、リストに残しておく理由もいらん」

「しかし…」

「桑田君。君は、ただの“管理者”だろう。此方の揉め事に口を挿むな。ツバサは、我等が許可するまで、地上に追放する」

「っ…」

「悪かった。なんとか食い止めようとしたんだが……。まるで聞き耳持たなくてな。歪クンには僕から言っておこう」

「ああ。頼むよ、桑田」

「…いいのか？」

「まあな。羅刹は怒るだろうな。あまり詳しくは教えるな。アイツ、きつと評議会に文句つけにいっちまうからな」

「ツバサクン。…！それは！？」

「ああ。俺の最後の研究の成果だ。……煉獄眼デイスホールド。完成とまではい

なかつたけどな。これは、地上に行った時、誰かに譲るつもりだ」

「人間に！？」

「まあ。命の保障は出来かねまいが。ちょっと、面白い家族を見つけてね」

「面白い家族？」

「ま。いづれ分かるぞ」

そう言っみえて、御堂ツバサみえ、第三レベルの魔人は地上へと去っていった。試作品の煉獄眼デイスホールドを持って。

……。

「そんなことが…」

「ツバサクンは、レベル3の中では、得に力の強い魔人だったからね。結構好き勝手にしていたらしい。そのせいで、評議会から追放命令が出されたんだ」

「レベル3？」

「そうだ。魔人にもレベルがあつてな。最低レベルが5・最高レベルが1・ツバサクンはその中間ってことになるね」

「兄さんが…、僕にあの目を…」

「分からないわね」

羅刹がツバサに疑問をぶつけた。いつも以上に不機嫌だった。ツバサはやれやれと言いたげな顔で、溜め息一つ。

「何がだい？」

「なんで、ただの何も知らない人間に、そんなものを託したの？自分に移植すればいいのに」

「そうだな。けど、俺じゃダメなんだ」

「？」

「俺は……、もうすぐ消える」

「え！？」

ツバサの突然の知らせに、羅刹と哲平は、驚きを隠せない。桑田は、その事に苦痛の表情を浮かべた。

「俺の体は、長い間地上にいたせいで、色素が薄くなって、内部はガタガタだ。明日にでも崩れそうだ」

ツバサは透けていく右手を見つめ、必死に微笑んでみせた。羅刹は握った拳を震わせ、白い頬には、涙が伝った。

「嘘だ！アンタは、母親を超える魔人になるって！言ったじゃないの！！こんなところで消えてどうすんの！？」

「羅刹…… ツ」

ツバサは背後にあつた電柱に凭れ掛かり、サラサラと体が所々に砂になっていくのを見ながら、優しく微笑む。

「…優しいね。羅刹は変わらない。いつも頼りない俺を庇ってくれ。そこは…蘭姉さんに似てるね」

「うるさい！最後の最後まで姉さんと一緒にするな！！」

「悪かった。もういいよ。こんな俺のために泣かなくて……。哲平。

君に魔人の資格を与える。高橋哲平を捨て、こつちでは『御堂隆樹』みどうたかきと名乗れ。お前は半分人間だ。人間界で過ごしても問題ない。君は、

人間の行く末と逆東京の行く末を担う新しい魔人だ。……元気でな。楽しかったよ。……」

その手は地面に落ち、
瞼がゆっくりと閉じた。
刹那。

「ツバサ…？」

緊急招集

ボロボロになった魔人の最後は虚しい。誰にも見取られず、いつの間にか灰になっている。残るのは、その人といった時間と言う名の記憶。魔人は滅んだと言われるほど存在の薄い種族。だから、魔人は生きた証を絶対に残す掟がある。ツバサが残したのは、『御堂隆樹』という名の新しい名の半人半魔。本名「高橋哲平」。

現在の東京。 星稜高校。

「高橋！」

哲平は名を呼ばれ、振り返るとそこにはクラス委員の荻玲子おぎれいこがいた。

「高橋！この前の進路調査プリントはどうした!？」

「ギクツ！」

「キョーは逃がさないわよ!！」

「やべっ！」

哲平は身の危険を感じて、廊下を駆け出した。それを追いかける玲子。それを見て、同じクラスの男子は、

「あーあ。またやってるぜ」

「懲りないな。痴話喧嘩」

「いや…、違うだろ？」

そして、その中に。

「迷惑。邪魔。どけ」

「あ！」

二人の間に入り、片方の手でそれぞれ二人の顔を鷲掴みにしたのは、紛れもなくあの歪羅刹ひずみらせつだった。彼女は少々変わった少女で、本当は異界の魔女。哲平だけが知っている真実。

「羅刹！？」

「歪さん！？」

「邪魔。痴話喧嘩なら余所でやって」

「だから、痴話喧嘩じゃない！！！！」

「息ひつたりね。…哲平、今日…分かつてるわよね？」

「ああ。分かつてるよ」

「へ？何、何？」

「それじゃ」

羅刹はいつにも増して不機嫌そうな顔をして、二人の間を通り過ぎた。玲子は馬鹿らしくなり、プリントの提出日だけ教えて、その場を立ち去った。

そして、零時出発の逆東京行きの電車が、人間界に留まっていた大勢の魔人たちを乗せて、出発する。その中に、羅刹と哲平の姿もあった。腕を組んで窓の外を眺める羅刹と、その隣の席に座り、読書する哲平。すると、羅刹が哲平に視線を移し。

「哲平。分かつてるわよね？逆東京あっちに言ったら、『御堂隆樹』よ。

くれぐれも下界の名前で名乗ってはダメだよ」

「うん。分かつてる」

「そう。…緊急招集。大魔人は、何を考えているのかしら？」

逆東京。そこは、死んだ魂たちが居住まう場所。羅刹は、まずは桑田の家に向かった。相変わらず、ゴツチャリとした部屋だ。本の山は、一行に減らないし。この前掃除したはずなのに…。

「や、やあ。いらっしやい。歪くん、隆樹くん」

「ええ」

「あ、はい」

やはり、名前が二つあるというのは、慣れない。兄貴もそうだったのだろうか？

「今日は、私も行きますよ」

「大魔人は、管理者も招集したの？」

「ええ。私以外にも、各逆県の管理者が招集されました」

「…歓迎には多い人数だな」

羅刹は急に難しい顔をした。羅刹が悩むところを、俺は初めて見た。大会議でも開くつもりか。桑田、これはお前にも火の粉が掛かるぞ

「ま、予想は大体出来てますよ。それが仕事ですから」

「ふ。そうか。では、行こうか」

羅刹は黒のポニーテールを靡かせ、妖しく微笑した。

逆国会議事堂。中は全然変わりない。一度テレビで見たことがある。結構でかい。しかし、集まって座るのは、魔人。そこが表の世界との違い。

「俺、ここでいいの？」

「ああ」

「…桑田さんは？」

「アイツは管理者たちの席だ」

周りには、自分たち高齢者が多く、殆どが老人や老婆。羅刹の年輩達だろう。…あれ？魔女ってどれくらいの地位だろ？

「静粛に。大魔人のお越しだ」

白ヒゲの老人が扉を開けると、そこから合計五人程度の大魔人たちがやって来た。結構若い魔人から、女の人一人、老人が多い。あの女の人、少し羅刹に似てる。

「蘭玉様。こちらです」

「ええ。…あら？羅刹が来てるじゃない」

「はい。何でも、新人魔人の付き添うだと」

「へえ…。じゃ、隣の子がそうなの？」

「はい。おそろく」

「ふふ」

和服に身を包んだ女性は、扇子を広げて微笑んだ。

視線を感じた羅刹は、強く女を睨んだ。

「あの女…っ！」

羅刹の怒りを押し殺すような声に、俺は身を震わせた。

「さあ、始めよう。魔人大会議を」

生き様と結果

表と裏。 光と影。 太陽と月。

世界には対成るものがある。そして、それゆえに世界は動く。けど、少年は対なる二つの自分を手に入れた。どちらにも属することもなく、少年は二つの境界線の上で生き続ける。

逆国会議事堂。

「それでは、始めようか。議会を」

刹那。隆樹（哲平）はごくりと唾を飲んだ。羅刹はずっと女の人を睨み続けていた。

「さあ、蘭玉様から」

「ええ。今回、この四天王が一人、歪蘭玉ひずみらんぎょくが議事を仕切らせていただきますわ」

あれ？『歪』？羅刹と同じ苗字だ。…てことは？

「あれは、私の姉だ。あんな女と同じ腹から生まれたなどと、考えたくもない！」

「へ？もしかして、仲悪いの？」

「仲悪いとかそういうレベルじゃないわよ！」

あはは。もんの凄く仲悪いわけだ。でも、優しそつで綺麗な人なの…。

「さあ。議題に入りましょうか。異端魔人、ツバサから意思と煉獄眼を受け取った新人魔人、隆樹君についてよ。長老たちは、処分したがつてるけど、私的にはとりあえず、異端審問ということにしたいのですが…」

「お待ちください！」

そこで立ち上がったのは、後ろの席に座っていた桑田だった。

「逆東京都管理者、桑田宗助くわたそうすけ。何か意見でも？」

ゾクッ…

桑田は、蘭玉に少し睨まれただけで、身体を強張らせてぞっとした。隆樹も一瞬、空気が氷付いたかのように、息が出来なかった。…。この者を僕に譲ってはもらいませんか？」

ザワ…ッ

一瞬周りがざわつき、羅刹もその言葉に唇を噛んだ。

「っ…。馬鹿がっ！」

「それは正気か？」

「はい。この者を、僕の管理する東京都の護柱ナイツに加えたいのです」

「！待て桑田！まだ私と狐目しかいないんだぞ！」

「だからですよ、羅刹くん。一人増えたことによつて、こつちの警備も堅くなるでしょう？二人だけじゃ、少し不満です。それに、煉獄眼はとても興味深いですからね」

「…分かった。もう何も言うまい」

羅刹はぼんつと自分の席に座り、立っていた蘭玉も静かに座った。どうやら、納得してくれたらしい。

「いいでしょう。だが、もし何か問題があれば、その時責任を取るの、お前だと思え」

「承知の上です」

「それでは結論を言い渡す。新人、御堂隆樹は、逆東京都の護柱ナイツに着任。これにて、議会を閉会する」

「は！」

逆国会議事堂前。

「羅刹」

「！蘭姉さん」

「ちよつといいかしら？今から」

「……ええ」

羅刹と蘭玉がやって来たのは、墓地。ツバサと歪家の女王と呼ばれた二人の母、蘭星らんせいの墓石が並んでいた。

「…ツバサは、笑ってたのね？」

「ええ」

「…よかった。よかった。…だつて。お母様」

「…知ってたの？私達とツバサが、実の姉弟だつたつてこと」

「ええ。育てられなかった赤子のツバサを孤児院に届けていた時、私も一緒だったから。そして、母様に、」

『いい？このことは二人だけの秘密よ。ツバサだつて、歪家の跡取りになるより、きつと嬉しいから。今度生まれる子にも内緒よ？』

「…つて。だから、私はアナタにも言わなかった。けど、アナタは彼と出会って恋に落ちてしまった。いけないの。折角母が引き離れたの…」

「…後悔はしない。たとえ、実の兄だつたとしても。私は、ツバサを愛していた。その事實は、決して変えられない。変わりはないの。変えさせないわ、姉さん」

「…そうね」

「……。隆樹^{アイツ}は、ツバサの生き様だ」
羅刹は、静かに、母の墓石に向かって、微笑んだ。

生き様と結果（後書き）

次でこの章は最終回。近いうちに、Yの章もやるよ。

エピソード

おや。お久し振りですね。今日は僕、桑田宗助くわたそうすけが司会をやらせていただきます。

まずは、この場所のことをお教えしましょう。

『逆世界』。君達がいる世界の逆にあるもう一つの世界。鏡のよ
うな世界。しかし、ここに来れるのは、魔人、魔女、それと死んだ
魂。ここは、云わば天国というところだ。何故普通の世界のような
のかというと、

『ここに来て、魂たちが普通に人間として、そして上に未練
を残している魂のために、魔女が設立したのだ』

だそうです。魔女というのは、魔人たちより地位が高い者たちの
ことです。魔女は一応女性だけですから。…おっと。ここから先は、
また次の機会にでも。

さて、次は僕のことです。

僕は、桑田宗助。逆東京都の管理者です。

次は、僕の友人、歪羅刹ひずみらせつクン。僕の知り合いの中で、唯一の魔女
格の人です。無愛想ですが、とっても綺麗で優しい人ですよ。

次は、僕が初めて出会った人間、高橋哲平たかはしてつべいクン。実は、半人半魔
だったんですよ。しかも、煉獄眼レイスクハドまで持ってました。

次に、羅刹クンの元彼氏で、追放処分を受けた魔人、御堂ツバサクンです。彼は地上で、『高橋翼』たかはしつばさとして生きていたそうです。

これで、一通り人物紹介は終わりです。続いては、煉獄眼デイスホールドについて。

煉獄眼。それは、すべてを破壊する力です。これはツバサクンの実験の産物で、現在は哲平さんが持ってますよ。

ま。今回のことは、これで全部でしょう。…え？羅刹クンの家族ですか？それは、次の章を見てくれれば、分かります。それでは、また後、良い夢を見ましょう。

T H E E N D

エピローグ（後書き）

これで、この章は終わりです。全七話（短っ！）。次回作、Yの章は、七月頃にと企画してます。
お楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349c/>

東京HEAVEN～Zの章～

2011年9月15日03時29分発行